

カトリック
新潟教区報



カトリック新潟教区
 編集発行人 教区報編集部
 〒951-8106
 新潟市東大畑通1-656
 TEL. 025-222-7457
 FAX. 025-222-7467

二〇〇五年 年頭司牧書簡

多様性における一致

新潟教区の皆様、主の降誕と新年のお慶びを申し上げます。

はじめに

新潟教区の中でも特に新潟県にとって、二〇〇四年は災害の年となりました。七月の水害と十月の地震は、各地に大きな爪痕を残しました。被災地では復興に向けた力強い歩みが見られるものの、以前のような生活を取り戻すにはまだかなりの時間を必要とすることでしょう。被害に遭われた方々に心からお見舞いを申し上げると共に、教会として、被災された方々と歩みを共にする決意を、新しい年の初めにあたって新たにいたします。また全国の方向がカリタスジャパンを通じて、被災者のために義援金を寄せて下さいました。その温かい思いやりの心にも感謝申し上げます。なお、長岡地区の教会や関係施設にも、緊急の修繕を要する被害がありました。共に協力して、復興にあたりたいと思います。

さて教皇ヨハネ・パウロ二世は、昨年十月からの一年間を「聖体の年」と定め、御言葉と聖体のうちに現存される主イエスへの信仰を深めることによって、信仰共同体が真に福音的共同体となるようにと呼びかけておられます。(使徒的書簡「主よ、一緒に泊まり下さい」参照)
 昨年九月に佐藤敬一司教様の後任として新潟教区長に着座するにあたって、私は「多様性に

おける一致」をモットーとして掲げました。新潟教区が全体として真に福音的共同体となるためには、それぞれの教会共同体が福音に生き、御言葉と聖体のうちに現存される主イエスと、喜びをもって歩みを共にすることが必要です。そのためには、それぞれの教会共同体が、自らの多様性に目覚め、その自覚のうち一致することが不可欠なのです。着座してまだ日が浅く、すべての教会共同体を訪問し終えていない今の段階では、教区全体に対する明確な指針を打ち出すのは時期尚早です。しかし新しい年の初めにあたり、この「多様性における一致」というモットーを足がかりに、この一年の新潟教区の目標を掲げてみたいと思います。



信徒たちとつどう菊地司教(寺尾教会)

多様性

中越地震が発生した時、私たちは被災者のの中に、日本人だけではなくブラジルなど諸外国出身の方々もいるという事実を目の当たりにしました。今や私たちの身近なところでも、地域共同体は様々な文化を背景に持つ人たちと共に作り上げていく時代となりました。日本のある教区では、日本人信徒より外国籍信徒の方が数的

に多いという現実もあります。異なる文化を背景とする人たちが共に住む時、そこには少なからず文化の相違による対立が顔をのぞかせます。教皇ヨハネ・パウロ二世は回勅「真の開発とは」において、「世界は一つであるはずにもかかわらず、第一世界、第二世界、第三世界、ときには第四世界などと呼ばれ、まるで異なる世界の集まりであるかのように」だと述べ、近年顕著になってきた世界の各地域における文化や価値の相違による分裂に警告を發しておられます。しかしまさしくこの現実が、現代世界は多様性に富んでいるのだと、私たちに明確に教えています。

聖パウロはローマ人への手紙において、「わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っている、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです」と述べています(ローマ人への手紙十二章四、五節)。私たち一人ひとり、それぞれが豊かな個性を持って生きています。そしてその一人ひとりが、あたかも一つの体の部分のように結ばれて、世界を作り上げているのです。ですから当然そこには、様々な考え方をもち、異なる価値観を持った意見の異なる人たちが存在します。もちろんそれは、同じ日本に生まれていたとしても同様です。人が共同体の中で生きていく時に、「多様性」を否定することは出来ません。

私たちにはいま、「多様性」の中に生きることで、求められているのです。

一致

「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。(ヨハネ十七章二十一節)」とヨハネの福音に記されています。またコリント人への手紙には、「一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者で

あると、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです(コリント十二章十三節)」と記されています。御子が御父と一致していたように、私たちも一つの体として一致するようにと呼ばれています。

とりわけキリストに従う私たちは、御言葉と聖体によって、キリストにおける一つの体において一致するようにと求められています。同じくコリント人への手紙に、「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です(コリント十章十七節以下)」とあり、またエマオへと下っていた二人の弟子は、イエスの御言葉によって「心は燃え」、食卓においてパンが割かれることによって目が開かれ、エルサレムに残された兄弟たちと再び一致するために旅立つのです(ルカ二十四章十三節以下)。

私たちにはいま、一致のうちに生きることが、求められているのです。

共同体を育てる

キリストにおいて一つの体として一致するようにはと呼ばれている私たちは、まさしくひとつの体の異なる部分のように、それぞれが豊かな多様性を持っているのです。キリスト者の共同体は、お互いの違いや立場を忘れて表面的な交わりを深める場ではなく、かえって積極的にお互いの違いを認め、お互いの立場を尊重しあって交わりを深める場なのです。

ヨハネの福音に、「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる(ヨハネ十三章三十五節)」とあります。私たちが共同体を形づくる目的は、ただお互いに仲良く楽しく一時を過ごすことにあるのではなく、あくまでも共同体の生き方を通じてイエスの福音をあかすること、すなわち宣教にあるのです。

御父と一致しておられる御子イエスは、「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす(ヨハネ二十章二十一節)」と述べて、私たち一人ひとりを共同体の一致のうちに宣教へと派遣しています。私たちがこの宣教の使命を果たすためには、まず一致の基礎である共同体を豊かに育てることが不可欠です。私たちが共同体を育てることは、すなわち、宣教の業そのものなのです。

御言葉と聖体

新潟教区全体が宣教共同体として豊かに育っていくためには、教区という一つの体の部分であるそれぞれの教会共同体が、福音に生かされる豊かな共同体として育てられる必要があります。それぞれの教会共同体が福音によって生かされていなければ、いくら教区全体の宣教方針をどのようにするべきかと話し合っても計画を立ててみても、絵に描いた餅でしかありません。

まず御言葉を大切にして下さい。ミサに与る時だけでなく、機会を見つけて聖書を手に取り、そこに記された御言葉を通じて主の語りかけに耳を澄ませて下さい。聖書を学問的に学ぶことも重要ですが、それ以上に一人でも、またグループでも、聖書の言葉に耳を傾け御言葉を味わって下さい。可能であれば、ふさわしい指導を受けて、御言葉の分かち合いを行って下さい。

そして教皇様の呼びかけにこたえて、「聖体の年」をよりふさわしく過ごして下さい。一致のあかしとして教会共同体の方々としばしばミサに与り、それぞれの教会共同体の事情に応じて、司祭に協力しながら、聖体祭儀の典礼をより豊かにするように心がけて下さい。

理想の教会共同体を目指して

その上で、是非この一年を通じてそれぞれの教会共同体で、話し合ってください。様々な機会に、様々なグループで話し合ってください。そのテーマは、「それぞれの教会共同体が理想とする

教会の姿とは何か」です。私たちが歩む方向を明確にするためには、まず理想を掲げねばなりません。

小教区を理想的な共同体へと育てていくためには、何か既成の手法があるわけではありませんが、教区全体に通用する統一された道が存在するものでもありません。それぞれの教会共同体が、それぞれが生きていく中で、試行錯誤を重ねて見いだしていくものだと思います。まさしくその手法においても、多様性が求められるのです。私は、新潟教区において、教会共同体育成のために、何らかの既成の方法や特定の運動に頼ることは賛成いたしません。

終わりに

新潟教区の皆様、「聖体の年」を共に祝いながら、この一年を「教会共同体を育成する年」にいたしましょう。それによって私たちは、ぶどうの木であるイエスに枝として繋がれ、「豊に実を結ぶ(ヨハネ十五章五節)」ことが出来るでしょう。

新しい年の初めにあたり、皆様方一人ひとりの上に、全能の神の豊かな祝福を祈ります。

二〇〇五年 元旦

新潟教区長 司教 タルチシオ 菊地 功

菊地司教の小教区公式訪問日程

2005年2月～6月

秋田教会	2月27日
土崎教会	3月6日
見附教会	3月13日
酒田教会	4月10日
鶴岡教会	4月17日
高田教会	5月1日
妙高教会	5月3日
米沢教会	5月8日
山形教会	5月15日
栃尾教会	5月22日
糸魚川教会	5月29日
村上教会	6月5日

宣教の業としての

共同体育成

年頭司牧書簡「多様性における一致」が発表された。書簡はこの一年を「教会共同体を育成する年」とするよう呼びかけている。

新潟教区が全体として真に福音的共同体となるために、書簡は二つの必要性を説く。一、それぞれの共同体が福音に生き、御言葉と聖体のうちに現存される主イエスと、喜びをもって歩みと共にすること、二、自らの多様性に目覚め、その自覚のうちに一致することである。

共同体育成のため、具体的な提案



視点

がなされている。まず共同体が御言葉に生かされるために、御言葉の分かち合いを行うこと。さらに聖体によって生かされるために、共にミサに与り、聖体祭儀の典礼をより豊かにすること。最後に「それぞれの教会共同体が理想とする教会の姿とは何か」を様々な機会、様々なグループで話し合うこと。

私たちは現状のままです。多様な人間の集まりである。だが、それだけでは教会にはならない。キリストに結ばれた、共同体という一つの体であつてこそ教会と呼ばれる。できあいの手法に頼るのではなく、話し合いの中でそれぞれの仕方でも共同体を育てて行く。多様な人間たちがキリストに結ばれた一つの共同体になって行く、これ自体が宣教の業である。

書簡の呼びかけにこたえ最初の一步を踏み出そう。

外国語のミサ時間 情報

時間の変更もあるので
詳細は問い合わせください。
2004年7月現在

場所	言語	日時・時間	TEL	住所
糸魚川教会	英語	毎月第1日曜日 11時	0255-52-3406	〒941-0062 糸魚川市中央2-1-40
高田教会	英語	毎月第2・第4日曜日 14時	0255-23-5348	〒943-0834 上越市西城町2-3-12
	スペイン語 ポルトガル語	毎月第1・第3日曜日 11時15分	同上	同上
国際大学キャンパス	英語	毎日曜日 20時		南魚沼市大和町777 (問い合わせ) 長岡福住教会ブルーノ神父 TEL 0258-32-5080
新潟教会	英語	毎月第1日曜日 12時	025-222-5024	〒951-8106 新潟市東大畑1-656
鳥屋野教会	スペイン語	毎月第4日曜日 12時	025-285-2411	〒950-0942 新潟市小張木2-7-46
山形教会	英語	毎月第1・第2・第3日曜日 14時	023-622-3574	〒990-0039 山形市香澄町2-11-15
大館教会	英語	毎月第1日曜日 14時	0186-42-1262 0186-42-1272	〒017-0043 大館市有浦1-7-45
鹿角教会	英語	毎月第3日曜日 14時	0186-35-2063	〒018-5334 鹿角市十和田毛馬内字下小路25

佐藤敬一司教が帰天



わが神よ、わがすべてよ
佐藤敬一司教のモットー

とは精いっぱい誠実に喜んでやる人だった。学校、福祉関係の責任ある仕事には苦労が多かったろうが、すべて神様がなさることなのだからと、いちども愚痴をこぼすことはなかった。

前新潟教区長のフランシスコ佐藤敬一司教が一月二日午前九時四十四分、腎不全のために帰天された。七十六歳だった。

兄弟である彼の霊性の基本は、聖フランシスコが描いた「キリストに結ばれている。キリストの中に生きる」ものであり、ご聖体の前に長時間を過ごすことが常の彼の姿は、ご聖体から生活の原動力をくみ取り、犠牲と祈りを実行して聖化した聖フランシスコの姿をほうふつとさせるものがあった。

菊地司教主司式の五日の葬儀ミサ・告別式には、白柳誠一枢機卿、岡田武夫大司教・池長潤大司教・高見三明大司教・教皇大使代理カレンガ参事官ほか十一人の司教、約五十人の司祭と教区内外から四〇〇人近い信徒が列席して、佐藤司教の永遠の安息を祈った。

教区邦人司祭を代表して川崎久雄神父(前事務局長・司教総代理)の告別式の弔辞。

ミサの説教で、マリオ・カンドウツチ神父(フランシスコ会新潟県上越市高田教会主任)は司教叙階当時の佐藤司教様を語った。彼はマザーテレサの言葉を引用して「私は偉大なことをするために呼ばれたのではなく、命じられた責務を忠実に守って最後までやり遂げたい」と言っていた。彼は頼まれたこ



司教様の訃報(ふほう)に接し、あまりにも早くその生涯を終えられたことに、本当にびっくりいたしました。九月の菊地司教様の叙階式で、会場割れんばかりの拍手を受けられ、教区のみんなから愛されていることを改めて感じさせられました。神様は、十分に労苦された司教様に報いるためには、私たちの考えていた「健康を快復して、安らかな老後を過ごす」よりも「すぐに招いて永遠の安らぎを与える」方が良いと考えられたのかもしれない。どうぞ、神様のみもとで安らかに憩われますように。そして、いつも心に掛けておられた新潟教区をこれからも見守り続けてください。

鎌田耕一郎神父(前司教総代理・現新潟県新津・加茂教会主任)は通夜の説教の中で、司教様は第六代新潟教区長として十九年間新潟教区のために働かれ、在任中に十八通の教書と十通の書簡を出している。

最初の教書(八五年)で「大きなことはできなくても、神様に喜んでいただける神様の子供のような教区づくりを目指そう」と呼びかけた。幼きイエスの聖テレジアの「幼な子の道」を思わせる出発点だったと思っ

て、居る。教書はすべて「共同祈願」で結ばれている。これは自らが信徒と共に祈りながら歩もうとされた姿勢の表れなのだろう。

突然、しばらく告解をしていないので告解することを望まれた。それは淡々と行われ、さわやかな風のように終わった。私は深い感動を覚えていた。何故なら、もう再び元気でこの処に

帰ることはないだろうと覚悟をしていたのだと思った。そしてかつていわば自分の部下であった者の前に頭を垂れ、自らを振り返る謙虚な姿がそこにあったと語り、参列者の涙を誘った。

福音に生かされた 教会共同体づくりを目指す

ことし九月二十三日(秋分の日)と二十四日(土)の二日間にわたって、山形県鶴岡教会で教区信徒大会が開催される。



大会テーマは「福音に生かされた教会共同体づくりを目指す」。

司教評議会から

新潟教区司教評議会の第四十回総会が十一月二十九日、三十日の両日、新潟司教館で開かれた。新司教の着座後、新たに任命、選出された評議員による最初の総会である。議題と内容は次のとおり。

中越水害と中越地震について
水害被災者への見舞金の分配

報告に続いて地震の被災状況と対応が話され、教区本部に寄せられた地震見舞金は、被災小教区、被災信徒に対して被災状況に応じて分配することになった。

教区信徒大会の開催について
教区信徒使徒職協議会からの新司教を迎えて早い時期に大会

また教区信徒の一体感と交流促進を強化する意図から、今後開催地は新潟市に限るのではなく秋田地区、山形地区でも開催することで、二〇〇五年の教区信徒大会は山形地区鶴岡市での開催が決まった。

教区課題と取り組みについて
菊地司教の発案で「教区の課題と今後の取り組み」をテーマに意見交換の場が持たれて、評議員からさまざまな課題が提示され、今後も継続して意見交換を行うこと、地区の司祭団でも話し合いの機会を持つことを申し合わせた。

司教叙階式会計報告

菊地司教様の叙階式の収支は左表のとおり。各小教区から教会維持費の一カ月分相当額を寄付いただき、当日の献金を合わせて財源とし、それでも不足する場合は教区共済基金から補助を受ける予定であったが、佐藤司教様の叙階式同様、補助を受けることなく行うことができた。

経済的に各小教区や当日列席の方々に支えていただいたこと、実施に当たっては新潟地区を初め、多くの方々の協力を得たことを心からお礼申しあげたい。なお残金については教区一般会計に繰り入れ、今後の教区の運営に役立させていただくことになった。

(司教叙階式実行委員会 副委員長 教区会計 川崎神父)

司教叙階式会計報告

収入の部			支出の部		
科目	摘要	金額	科目	摘要	金額
特別寄付金		7,442,718	謝礼	大使、司教様へ他	1,774,200
	御祝金(各司教様より)	1,650,000	通信運搬費	郵送料、運賃	87,910
	特別献金(各小教区)	5,003,813	旅費交通費	タクシー代等	129,280
	ミサ献金(当日)	788,905	印刷費	挨拶状等	404,854
			消耗品費	花徽章等	74,276
			リース代	パイプ椅子等	97,461
			祝賀会	一般、司教団等	2,264,094
			宿泊費	ホテル宿泊費	179,235
			雑費	紋章作成費等	625,646
収入合計		7,442,718	支出合計		5,636,956
			収支		1,805,762

新潟県
中越地震

被災地その後

新潟県中越地震の発生から三カ月がたった。被災者は仮設住宅や自宅に転居したが、雪に耐える新年となった。

十月二十三日週末の夕方に発生した新潟中越地震の被害は、中越地方の長岡・十日町・小千谷・山古志など二十七市町村の広範囲におよんで、上越新幹線の脱線・高速道路をはじめ各地で道路の陥没、亀裂、路面の崩落や山間部を走る国道が寸断されて救助活動が不能となったために、長岡市以东は数日間孤立状態となった。

特に発生から四日目の二十六日になっても体を感じる余震がすでに四三〇回以上も続いて、被災者は不安におびえて動揺した。

地震から一週間後の被害状況(新潟県調べ)は、死者三十七人、負傷者二二七四人、体育館への避難者は八万四千人を超えて、親戚先などに避難している被災者を含めれば推定一〇万人を超すと報じられた。

七月の豪雨被災の救援緊急募金の際も迅速な支援対応で活躍したカリタスジャパンは、中越地震発生直後の二十五日に全国の各教区本部事務局を通して緊急募金の呼び掛けを開始、十月三十日には新潟県地震対策本部と協議して全国からの献金で調達した緊急の乳幼児のための粉ミルク二八〇缶分(七十万円相当)を被災地の長岡地域振興局に搬入した。十一月二十九日には援助物資の石油ストーブ四〇〇台を寄贈し、その後更に四五八台を追加。更に十二月中旬に被災者救援資金として五千万円を新潟県に手渡した。

中越地震の被災は教会共同体(関係施設も)や地域信徒においても少なくない。長岡福住・長岡表町・十日町・見附教会と合わせて十日町教会は敷地の地盤が動いて建物の土台が壊れ、床や壁が落ちて緊急修理でしのいでいる。

復興を急ぐ十日町教会



復興を急ぐ十日町教会

でいる。信徒のKさん(福住)は家屋全壊で復旧の見通しがたらず、新潟市の親戚宅に寄留、全壊のSさん(表町)はケアハウスに入居、Oさん(十日町)は西川町の仮設住宅に住んでい

る。家屋の半壊は一〇世帯ほどと推定される。

館の避難所は十二月二十日に閉鎖、被災者は仮設住宅や応急修繕の自宅などでの仮住いとなったが、新潟県内でも例年は数メートルにも達する豪雪地帯の被災地は、十二月二十二日未明から降り始めた雪で本格的な雪に覆われて、寒さに耐えての厳しい生活となった。

直江津教会 創立五十周年

もう一度沖に漕ぎ出そう

五十周年を迎えた直江津教会は十一月三日、二〇〇人近い県内の信徒と菊地司教司式十六人の司祭で記念ミサを捧げた。

当日(三日)記念ミサの説教で菊地司教様は「この直江津の地で福音の種を蒔き、共同体を育てあげ、小教区を作りあげてきた宣教師の方々と信徒の方々の熱意を、私たちも引き継いで福音宣教に励みたい。

福音の種が蒔かれた当時も、五十年が経過した今も、直江津教会は福音宣教の最前線にある。この創立五十周年を期に日々の行いを通じて、福音の証し人になる決意を共に新たにしよう」と呼びかけられた。

記念ミサに続いての式典では、四人の特別聖体奉仕者の任命式と聖母保育園から教会への贈り物「教会の蛍光灯付大看板」が贈呈された。

主任司祭フェルト・ネルスカンプ神父様は「漁に出かけた弟子たちは夜通し働いたが、何も獲らずに戻ってきた時、海辺に立っておられたイエスが、もう

一度漁に行きなさい」という言葉に従って、舟が沈むほどまで魚が獲れました。



直江津教会の記念ミサ

す。五十年間働いてきた私達はイエスのことばに従って、さあ、もう一度沖に漕ぎ出しましょう」と新しい出発を強い決意で述べられた。

中越地震の直後であり、祝賀会場を変更して保育園舎内で行ったが、八人の青年男女のコーラスぼこ・あ・ぼこの詩篇の合唱、元直江津教会信徒会長(いまは高田に転居)茨木武夫さんのアヴェ・マリアなどのハーモニカ演奏やサムエル神父

様(現富山県魚津教会主任司祭)の日本での宣教活動の出発点であった直江津教会の思い出話と、二三〇〇年前からあった

殉教地巡礼

佐渡キリシタン百人塚

十月十一日に教区主催の佐渡キリシタン百人塚巡礼が行われ、菊地司教ほか司祭五人と三十人近い信徒が佐渡へ巡礼して共祭ミサを捧げた。

午前九時過ぎに佐渡教会(佐渡市両津)からバスで相川キリシタン塚の登り口に向かった頃から激しい雨であったが、司教様をはじめ川崎師(佐渡教会主任)、大瀧、佐藤勤、石黒、ラウル、フェルナンドの五師と、佐渡に集まった新潟地区・新発田地区・地元などの三十人近い信徒巡礼者は、登り口から歩き続けること三十分、両側を篠竹が覆う急坂の山道を、一列に並んで殉教の丘キリシタン塚の中



巡礼ミサ(佐渡教会)

山峠をめざした。雨天のために殉教地での野外ミサを見合わせて、全員は十字架のキリスト像の前でロザリオの祈りを捧げ、登り口へ戻って同午前十一時三十分から佐渡教会で司教様司式の共祭ミサを捧げた。

佐渡の殉教は佐渡年代記によると一六三八年(寛永十五年)から一六四五年(正保二年)頃まで、幾たびも続いたとされている。百人塚の由来となった中山峠での百人余の大殉教は一六三八年のことと記されている。一九一五年(大正四年)にこの刑場跡を相川町から墓地として買い受けて相川教会の墓地として使用していたが、一九八八年(昭和六十三年)春、瀬田教会(東京教区)の高島実・昌子夫妻によって殉教記念碑と造園工事が施されて、同年九月二十五日、駐日教皇大使ウイリアム・アクイン・カルー大司教ならびに東京教区長白柳誠一大司教、新潟教区長佐藤司教ほか多数の人々が列席して完工記念ミサが捧げられた。殉教から三五〇年目であった。

司教様は説教で「日本の教会はキリシタン殉教者の流された血に支えられている。新潟教区も、佐渡相川と米沢北山原で殉教された多くのキリシタンの方々の信仰と流された血に支えられているのです」と語られた。